

公開講演会
公開シンポジウム
13:05~14:50
芸術館

鈴木鼓村の場合

和田一久

明暗を分けた鈴木鼓村と宮城道雄の箏曲改革を考察する上で、彼らの育った幼年時の環境の差異と、二十年の時間差を隔てた、二人を取り巻く文芸思潮の変遷に留意する必要がある。

鼓村の生家は宮城県亘理郡の紅花を扱う豪商で、しかし明治維新を境に急速に没落しつつある家であった。小さい頃から手の付けられない腕白者であったと自らは語るが、鈴木の家には代々教養に富んだ当主が現れ、鼓村にも、箏曲・書画・俳諧の古典的教養が培われていたのである。彼が京都に憧れたのは母親の影響だが、京都で古典（特に『平家物語』）憧憬は病的なものとなり、日常を闕腋の袍で過ごすほどになった。彼は最初軍人になろうとしたことでもわかるように、極めて保守的な心情の持ち主であり、伝統を終生引きずって生きたといえるだろう。

その彼が箏曲改革に志したのは、福井で光崎検校の『箏曲秘譜』（「秋風曲」の譜本）に出逢い、「文学と音楽の結合」に気づいたからであるが、箏曲改革をなし得たのは、京都で雅楽と平家琵琶を学んで、「日本音楽の歴史は歌謡の歴史である」と把握することができ、そして高安月郊・薄田泣菫の抒情詩とめぐりあったからである。

明治三十年代は、不平等条約を解消すべく、富国強兵・国粹主義のさまざまな動きと、一方で浪漫主義文学が若い世代に花開くという、異質な風潮が辛くも共存し得た、希有な十年であった。その時代の流れに沿って、鼓村は「古き革袋に新しき酒を盛る」＝「伝統的な手法の上に、古典的歌唱法に則って清新な抒情詩を歌謡に乗せる」という、新古典主義箏曲をうち立てることができた。

しかし、箏曲の器楽面が歓迎され（それは江戸時代後半から已に始まっていたが宮城道雄の出現がとどめをさした）、従来の抒情詩が飽きられてしまう（口語自由詩が出現し、月郊・泣菫が詩を詠めなくなった）と、京極流そのものも衰退した。時代が先に行ってしまうという局面に、自らの理想と反する故に鼓村は敢えて追随しなかったからである。

魅力的な演奏家であった鈴木鼓村・雨田光平を次々に失うとともに、時代に取り残された京極流箏曲がただ今は絶滅寸前にあるのは、それはそれでよいのではないかと思われる。

公開講演会
公開シンポジウム
13:05~14:50
芸術館

宮城道雄の場合

千葉優子

宮城道雄（1894-1956）が生きた明治・大正・昭和は、西洋文化との邂逅によって日本の文化が最もダイナミックに動いた時代であった。当初、地歌箏曲界は当道の廃止によって支持基盤を失い、一時的に混乱したものの、俗楽の中では上品なイメージだった上に、もともと音楽として自立していたため、音楽自体の近代化を進めることがいち早くできたジャンルである。そして、その牽引役の一人が宮城道雄であった。

宮城は居留地に生まれ育ったことにより、幼少より西洋音楽に触れる機会に恵まれ、また、13歳で朝鮮（現韓国）へ渡り、軍楽隊や西洋音楽のレコードに多く触れるなど、当時の日本人としてはかなり特殊な環境に育った。それらも影響したのであろう。彼は西洋音楽から刺激を受けることで、自らの感性を磨いた結果、新しい音楽様式を創り出した。そして、それを時代が後押しするという側面もあったと言えよう。一方、宮城の新様式の作品には、三曲楽以外の伝統音楽、特に雅楽研究の成果が反映されている。宮城は笙と雅楽を大正11年（1922）頃から藺兼明のもとで習い始めたが、そのきっかけとなったのが、雨田光平に聴かせてもらった雅楽のレコードであったと宮城自身が語る。

宮城は自作の音楽を箏曲史の必然的な流れの一環として捉えていた。雅楽から派生したとされる筑紫流箏曲を一般化した八橋検校、それを地歌と融合して、より一般化した生田流、江戸の人に適した音楽に変容させた山田検校のように、自らも現代人に合うものとしたと述べている。

現在、宮城の著作・言説等として608編（インタビュー記事等を含む）が確認されている。そこでは前述のような箏曲史観、また作曲理念や、当時の西洋音楽に見られたモダニズム的傾向に対する所感など、多くの音楽理念がかなり明確に述べられている。今年1月に『宮城道雄著作全集』全5巻を刊行し、資料集成的な意味も含む著作目録も作成できたことで、初めて宮城道雄の著作の全体像を把握することができたわけだが、今回は、その成果をもとに宮城道雄自身の言説を中心に論考することとする。